

1. 海洋環境変動調査

志村健・氏良介

目的

本県沖合の魚群の回遊状況の推定，漁場形成の予測に必要な海洋環境の調査等を行う。

方法

試験船第一鳥取丸（199 トン）を使用して，本県沖合に設定した沿二-2 線（図1），8，10，12 及び2月に，沖合-2 線（図2）で9月及び11月に観測を実施した。稚沿岸二-2 線（図3）で4月と5月に，稚沖合二-2 線（図4）で3月と6月に海洋観測とノルパックネットを用いて水深 150m 深からの鉛直曳きにより卵・稚仔の採集を行った。す-1 線（図5）で7月に海洋観測とスルメイカ釣獲試験を行った。海洋観測は CTD（アレック電子 ST-2000）を使用し，全点で表面から 500m まで（500m 以浅の場合は海底直上まで）の水温・塩分を測定した。ただし，表面水温は棒状水温計により計測した。塩分については，全点で表層をバケツ採水，さらに水深 1,000m を超える 1 点でメモリ式 CTD 制御マルチボトル採水器（シーバード SEB19+SEB-32C）により採水した試料を持ち帰り，サリノメータ（ギルドライン Autosal18400B）で検定した。

結果

定線観測を計画どおり実施した。定線観測の代表点（観測点：36.00' N, 133.40' E）による表面から水深 100m 深までの月別水温変化を調べた。また，栽培漁業センターヒラメ親魚池の午前 9 時の水温を毎日計測した。定線観測の代表点（観測点：36.00' N, 133.40' E）による表面から水深 100m 深までの月別水温変化及び栽培漁業部ヒラメ親魚池での水温定置観測結果を図6及び図7に示した。

隠岐諸島周辺海域での本年の海況は以下のとおりであった。沿岸の表面水温は7月以外高めで推移し9月中旬～10月上旬は1991年以降で過去最高の水温を記録した。11月以降は平年並みに推移した。50m 深水温は，7月に低めとなったが，他の月では平年並みか高めとなった。

島根沖冷水はやや接岸し山陰若狭沖冷水が離岸していたため，沖合を流れる対馬暖流は，隠岐諸

島北方で大きく北上する流れとなった。200m 深の海況は，周年を通して丹後半島沖に暖水塊が停滞した。

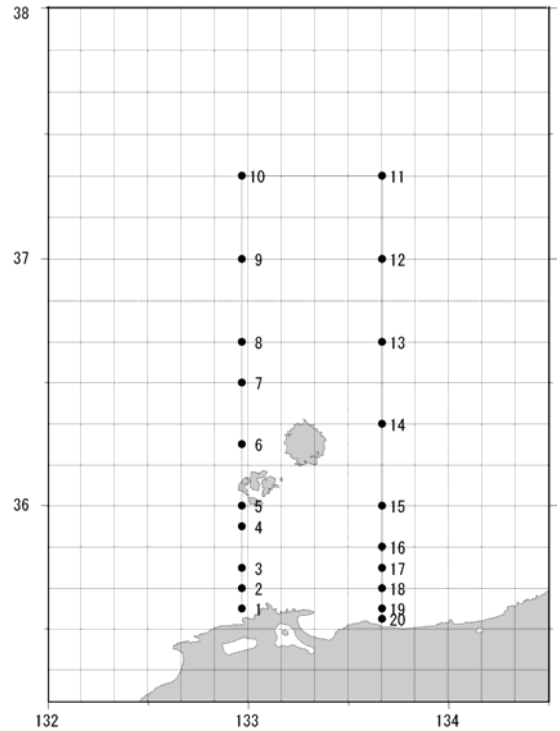


図1 沿岸観測定線（沿二-2）

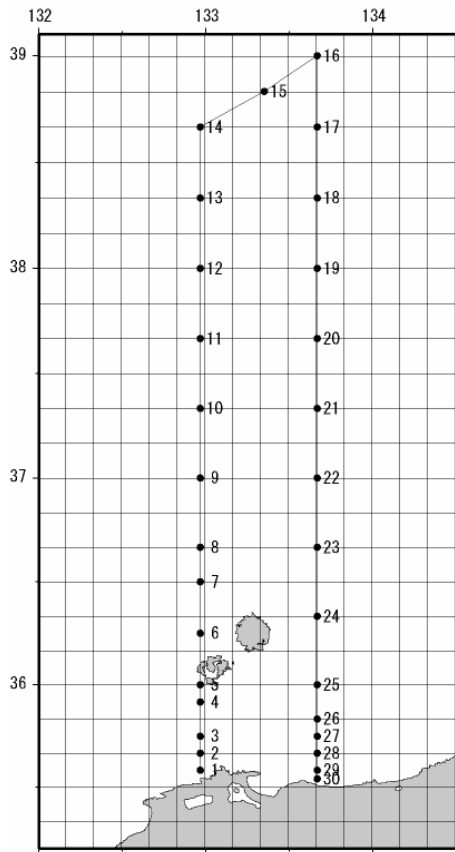


図2 沖合海洋観測定線（沖合一2）

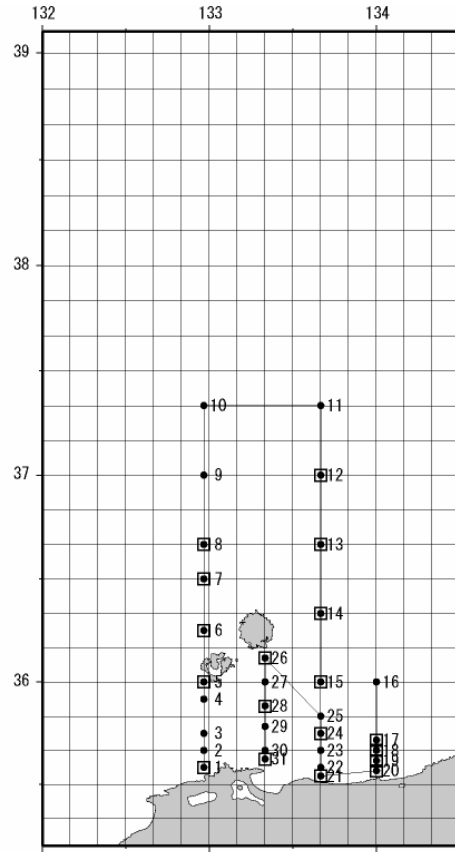


図3 沿岸稚魚調査定線（稚沿岸二-2）

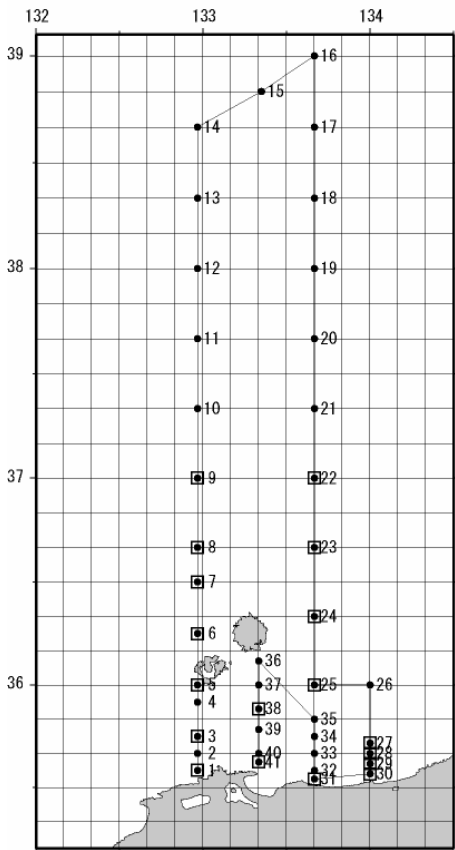


図4 沖合稚魚定線（稚沖合一2）

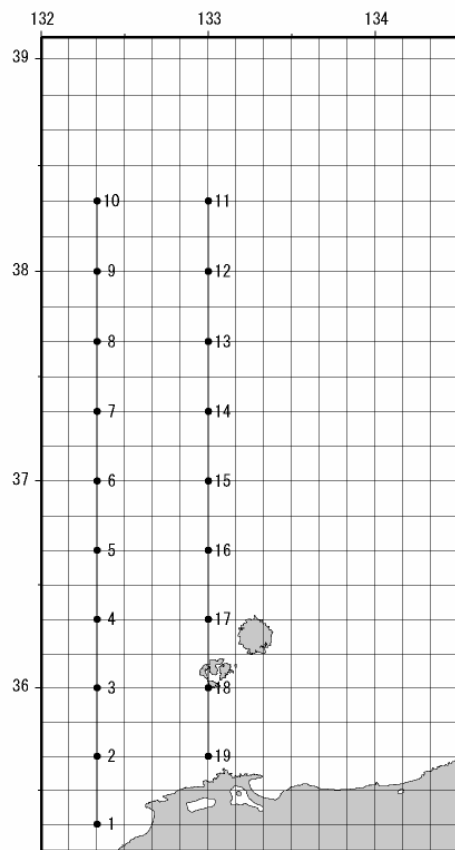


図5 スルメイカ漁場一斉調査定線（す一1）

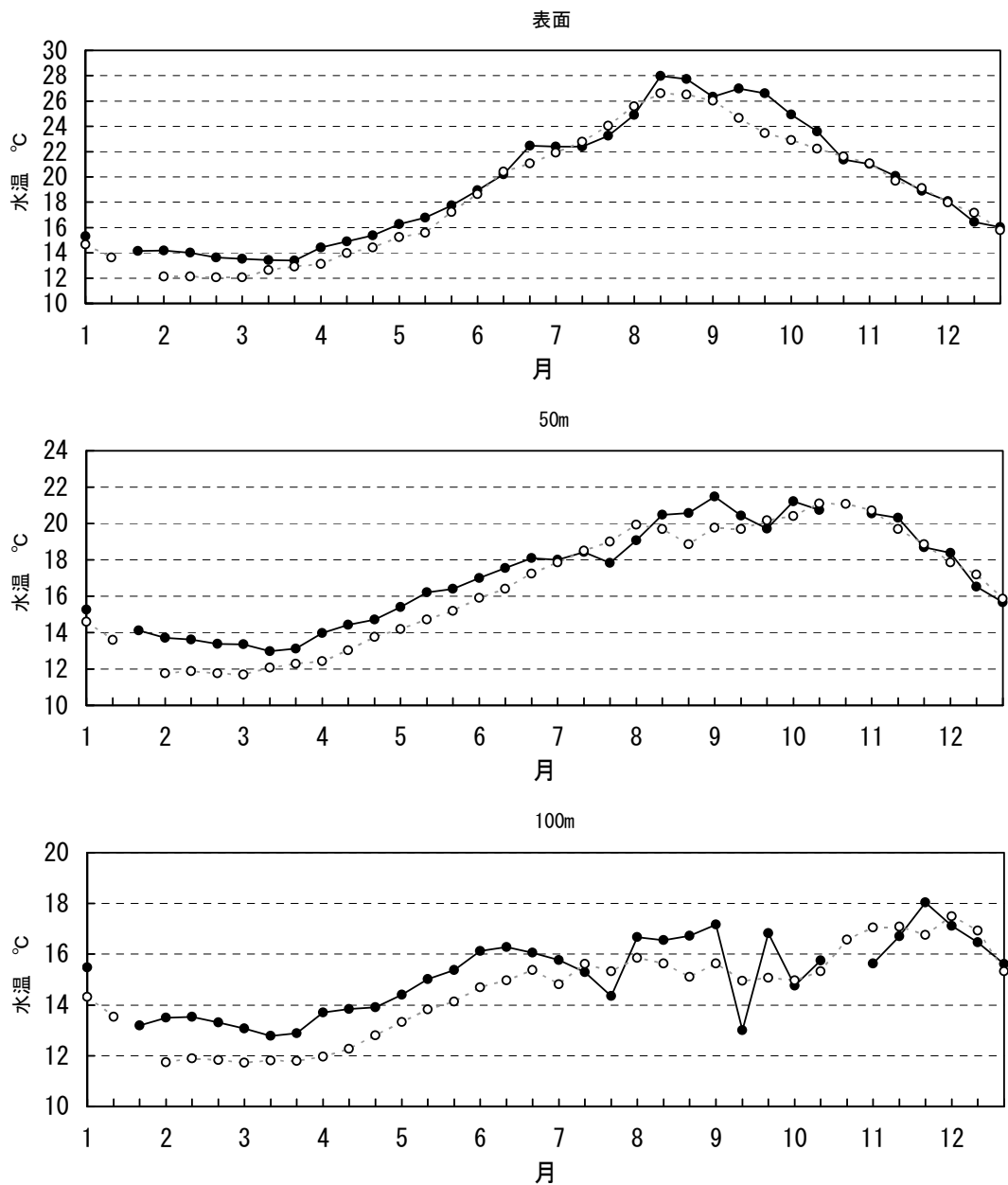


図6 定線観測による赤碓沖の月水温変化
上から表面、50m深、100m深 ●: 2007年; ○: 平年

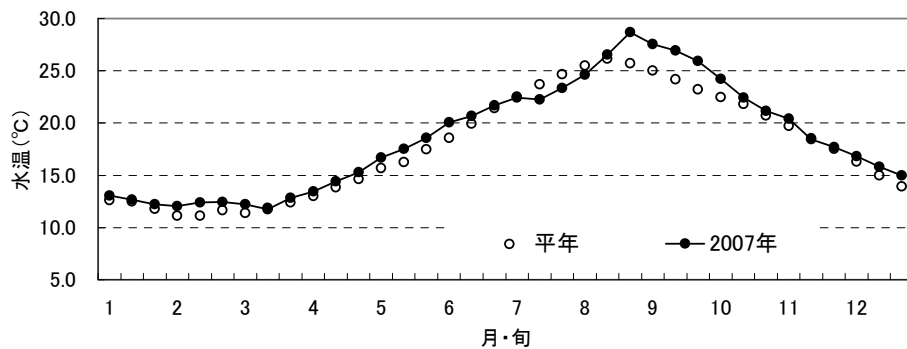


図7 栽培漁業センターヒラメ親魚池の旬平均水温の変化